

結草

kusamusubi

No.15

publishing house: moriyama 2-19-52 Kanazawa
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2014.02.08

人間として生きる道標

道因寺住職

相馬 豊

おはようございます。浄光寺さんの報恩講・ご満座のお時間をいただきました、白山市の道因寺の住職としております、相馬豊と申します。どうぞよろしく願います。

親鸞聖人が聞き得た南無阿弥陀仏の教え、その教えが今日、私たちのところに伝え広がっております。それでは、親鸞聖人が聞き得た南無阿弥陀仏のお教えというのは、何を私たちに伝えてくださっているのかと申しますと、それは人間存在の事実です。このことを親鸞聖人は、南無阿弥陀仏の中に聞き得たということ

です。具体的に人間存在の事実ということが、私たち一人一人に語りかけられています。この人間存在の事実という形の中で、私自身の中におきましては二人の人を思い出します。

一人は、五十年前に亡くなりました祖父です。小学校二年生の私にとって初めて経験した人の死になります。その祖父が亡くなっていく折、叔父、叔母たち、そして有縁の方々がお寺の座敷に集まって祖父の死というものを見てきました。その光景の中で、三つの光景が今だに五十年経っていても自分の中に鮮明に

蘇ってまいります。

叔父、叔母たちが祖父が寝ている両脇に分かれて膝から足首にかけて、そして肘から手首にかけて手を擦りながら「戻ってこい、戻ってこい」、こういう言葉をかけながら両手両足を擦っている姿、そのことが先ず一番目に自分の記憶の中に留まっています。そして二つ目が、午後の六時三十分過ぎに「臨終です」とお医者さんの声を聞いた時。叔父、叔母たちの今まで「戻ってこい、戻ってこい」と擦っていた手が、一人また一人止まって嗚咽と涙の中から集まった方々誰がというわけではなく聞こえて来まされたのがナンマンダブツ、ナンマンダブツというお念仏の声でした。この祖父の死というものが私にとっての人の死の始まりでした。なぜ亡くなった後にナンマンダブツを申しているのか意味も分からず、ああそういうものなのかなというふうなことを受け取っておりました。それがまず一人の方です。

お二人目は、私は七年前に住職に就いたのですけれども、その住職に

就く前、私自身は老人介護福祉施設の方に勤務しておりました。その勤務先の中で、当時はそれほど大きな問題になっていなかったんですけども、胃瘻という問題が現実に出るようになってきました。入所した時は自分の口で食べ物を食べられていた方でしたが、段々段々、自分の手で咀嚼嚥下が出来なくなってきた。それで介護職員の方が代わりに介助の手をつけていく。しかし、それのみるみるうちにその介護職員の介助すらもうできなくなっていた。家族の方、介護職員、そして主治医を交えての三者の話し合いがもたれました。家族としては大切な人です。どうか生きていてほしいと願っています。しかし、現実的にはもう自分で、介助の手で食事を摂ることが出来ない現実があります。その時に主治医の方から提案されましたのが胃瘻です。胃に手術をして直接穴を開けて、そしてそこに管をつけて朝昼晩、流動食を流し込んでいく。胃瘻の問題が起きました。胃瘻をすれば、体力はつきます。生きるという事もできます。しかし、家族の方々

は即答はできませんでした。自分自身もその場に立ち会った時、考えました。自分だったらどうなんだろうか。そこまでして生きなければなら

ないんだらうか。生きるとは一体どういうことなんだろうか。いろんなことがこの介護の現場の中で自分自身に問いかけてくれました。最終的には家族の思いというものがあって、胃瘻という処置をつけられまして。みるみるうちに元の体重に戻り、そして健康を取り戻してきました。しかし、健康は取り戻したとしても逆に失ったものもありました。寝たきり状態になっていった。いくらリハビリしても自分で起き上がることが出来ない。物を持つことが出来ない。しゃべることが出来なくなつた。そうしますと、床ずれ、褥瘡じよくそうという問題がでてまいります。二時間から三時間おきに寝返りが打てない彼のために介護職員が、体位を交換するといふことをします。最初は仰向け状態。今度は体を左に倒す。また二、三時間すれば、仰向けにして今度は右側に体位を交換する。それがずっと続くわけです。その彼が入浴の折に、

彼のベッドに横になって寝てみました。見えるのは天井、壁、そして右側から見える外の風景。この三つしか見ることができませんでした。

二、三時間おきに交代して体位を交換するということになる、熟睡はともできません。なぜ人は生きなければならぬんだらうか。なぜそこまでして人は生きようとするんだらうか。祖父の死とそして介護の現場の中で自分自身に突きつけられたのは、人間の存在の事実、いのちの相すがたということです。いのちの相を私に二人の方々が見せてくれました。「戻ってこい、戻ってこい」と、叔父、叔母たちが一生懸命擦つたとしても、悲しいかなや戻らなかつた。嗚咽と涙。私たちは日々毎日の生活においては、自分の考えや自分の思い都合を中心とした生き方をしております。あれもしたい、これもしたい。こうなればいい、こうなつてほしい。自分の考えや思いを都合を中心とした日常の私たちの有り様です。叔父、叔母たちが大切な祖父に対して戻ってきて欲しい、死んでは困る、一生懸命擦りながら「戻ってこい、戻つ

てこい」と。まるで自分の考え思いです。しかし、いのちの相はそれを通さなかつたということです。いのちの相というのは事実を私たちに教えてくれる。自分の考えや思い都合が通らないという世界がありますよということ。それがいのちというものではないでしょうか。そして嗚咽と涙、大切な人を失つたという辛さ悲しみです。それは私たちが毎日経験していること体験していること同じです。

しかし、大切なことはその悲しみだけではなくて、そこから問いかけてられているものがあるということですね。そのことを私たちは忘れていくのではないのでしょうか。自分自身に問いかけてられている大きな問題があるということですね。介護の現場の中の胃瘻という問題。家族たちが相談して結論を出して胃瘻をする。現実的には、確かに人間の有り様としては生きています。しかし、二、三時間ごとに身体の向きを変えられていく。何も喋れない。同僚と一緒に彼のおむつ交換をした折ですけれど、手を擦つておりましたら、涙を

ポロポロと流されました。一体どういう意味の涙であるか分かりません。しかし、そこに生きるということの凄さと尊さ、それを私は感じました。生きることの尊さと厳肅さです。しかしその厳肅さと尊さのなかにあつても命は終えていかなければならない。自分の考えや思い都合が通じないということがありますよ。ところが先程も申しましたように、私たちは日常生活の中に、自分の考えと思いと都合を大事にし、それを優先して事にあたっております。いつの間にかいのちの相を私たちは見落としているのではないのでしょうか。生きるとはどういうことなのだろうか。なぜ生きなければならぬのだろうか。お一人お一人いかがでしょうか。自分がもし胃瘻という処置を執らなければならなかつたとしたら、どうされますでしょうか。自分では意志表示ができない。代わりに家族の方が意志表示をする。家族の思いは失いたくないという思いです。失いたくない。生きて欲しいという思い。しかし、ただそれだけだったら本当にいのちが見えるのでしょうか。

そのことを通しながら突きつけられていることは何かというと、生きるとはどういうことなのだろうか。なぜ人間は生きなければならぬのだろうかということですか。晩年は胃瘰というかたちをとったけれども、それまでにはいろんな出来事を抱えて働いて、色んな事に悩み苦しんだ彼。しかし、その中であって晩年は胃瘰というかたちを通して生涯を終えていかれました。なぜ人間は生きなければならぬのか。何をするために生きていくのでしょうか。まさに親鸞聖人が聞き得た南無阿彌陀仏の教えというのは、人間の存在の事実を、いのちの相を私たちに伝えているのではないのでしょうか。しかし、私たちは、いのちの相を見せられても受け入れられません。自分にとって都合のいいものは私たちは手にしたい。ところが受け入れられないものがあるわけです。それが死というものなのです。私たちは、死というものをなかなか受け入れられることはできません。今日も朝刊を見ておりましたら、伊豆大島のあの災害の現場の中に一人の女性が呆然と立ち竦んで



「除夜の鐘」撮影 野関哲也

いる姿が写っておりました。それは二年半前の東日本大震災の折と同じです。ただ呆然と立ち尽くすしかない。どうすることもできない。言葉にならない悲しみやいろんな思いを背負いながらただ呆然と立ち尽くす。なかなか受け入れられないと思います。受け入れられないのはなぜかといいますと、私たちの中にはいくら仏教で生老病死ということが教えられ、語られたとしても私には受け入れることが出来ないからです。それは死にたくないという問題

です。生に対する執着です。私たちは常にこの執着を持ちます。どこまでも自分や連れ合いと築いてきたこの世界を失いたくない。執着心を持つております。それが本音です。死にたくない、これが本音であり、本心です。しかし、事実はこの認めないわけです。認めないからこそ、そこに何が見えてくるか。私たち一人一人の中にある愚かさ、迷いの姿です。生に対する執着、これは迷いです。しかし、その迷いは、教えを聞いたら迷いが晴れるか。晴れません。ずっと迷いの存在の中で私たちは生き続けるしかありません。愚かさを抱えながら、そして迷いの自分というものにそれを抱えながら生きていくということですか。決して親鸞聖人の教えを聞いたから迷いが晴れたり、愚かさが取れるということとは全くありません。愚かのまま、迷いのまま、それが誰であるかを教えてくれるわけです。いのちの相を見ていてもその中に迷う。なぜ生きるのだろうか。どうすればいいんだと。どうしてあげたらいいんだと。みんな迷いです。

その迷いの中にあつて、ただひとついのちの相という事実の中に改めて悲しみや辛さを逆に私たちはいのちの相から確認させられていくのではないのでしょうか。

祖父が亡くなった時、「戻ってこい、戻ってこい」と言いつつも戻らなかった命。その事実に出うた時、嗚咽と涙になった。しかし、そのあとです。なぜお念仏の声が出てきたんでしょうか。人が亡くなったからナンマンダブツ、ナンマンダブツと申したのでしょうか。その後、私も身も身内の死、親族の死、友人の死、お預かりしておるご門徒の方々の死、多くの方の死を看取り、あるいは見送ってまいりました。その時にはなぜ五十年前、祖父の時にナンマンダブツ、ナンマンダブツという声が聞こえたのだろうか。その多くの人の死ということを通して時、五十年前のお念仏の声が、どういうことを私に教えてくれていたんだろうか。少しづつ、なんとなく自分で頷けるようになってきました。それは私自身もまさに自分の考えや思い都合で生きていくということです。子供のこと、

お寺のこと、ご門徒さんとの係り、地域との係り。自分の考えや思いや都合というものが全面に出ます。それが全面に出た時、そのことをどうかして伝えようと苦勞します。しかし、それはあくまでも自分の思いではないわけです。その思いで亡くなった人を前にして念仏を申したわけではないわけです。逆にそのお念仏が何を私たちに指し示してくださっているかです。

び す む さ く

二千五百年前にお釈迦様によって見出された教えが仏教という教えになりました。その教えがインド中に伝わっていき、そして中国の方にも伝わっていく。そうしますと中国の方からは、三蔵法師さんぞうほうしという方々がインドの方へ歩いていかれます。中国からインドに經典を書き写しに行く、あるいは出来上がった經典を持ち帰ってくる方を三蔵といっています。その三蔵に法顕ほっけんというお坊さんがおられました。その法顕が中国からインドまでの往復をするその様子を日記に書き留められました。そこにこういう言葉がでてまいります。「空には飛ぶ鳥もいなく、地には這う虫

も獣もない。自分が歩いて行く方角が唯一決められるのは、朝日が昇り夕日が沈む方向、それによって自分が歩む方向が見いだされる。しかし方角が分かったとしてもただ目の前には茫茫ぼうぼうとした広い大地が広がっているだけだ。その中を歩いて行くと忽然こつぜんと人骨が現れる」と。私に先駆けてその經典を持ち込もうとされたが、行き倒れになった方。自然の風、そういう中であって風化して骨となった。忽然と人骨が現れる。「人骨をもって行路の道標となす」と。こういう言葉が書かれておりました。中国からインドまでの往復、その道標となったものが何か。骨やということです。私たちにとりましては亡き方々です。親鸞聖人も含めてです。亡き方々は私にとって何を指し示してくれているのか。人として歩む道の道標やというのです。亡き方と私たちがどういつながりがあるか。ただ亡くなったのではないのです。人間として生きる道の道標。私にとりましては、五十年前の祖父の死、介護現場での胃瘻という問題を抱えて亡くなっていかれた彼、それらの

ことが人として生きるということはどういうことかを私に示す道標となっております。それが教えを聞くという原点ではないでしょうか。私たちがなぜ教えを聞いていかなければならないのか、それは人生の人間として歩む道標を先に亡くなった方を通して私たちは訪ねていくということですから。そこに生きるということ、最後に死んでいくという意味をこの私に道標として教えてくださっています。この私や私たち一人一人は、悲しくても最後亡くなっていかなければならないという人間存在の事実を抱えているからです。この事実をまさに教えてくれたのが親鸞聖人が聞き得た南無阿弥陀仏の教えというものではないでしょうか。その教えに出遇うてみたら自分の中に、そして親鸞聖人にも執着するといものがあつた。生に對する執着、いろんな執着を我として生きなければならぬ。それが私であつたということをお教えたいただきました。迷いの存在であつたと。そのことがはつきりいたしました。それを親鸞聖人は、南無阿弥陀仏の中から聞き得て

いったのでしよう。つまり、私たちも教えを聞くというのは、仏さんのその呼び声と亡き人の声に出遇うていくということではないでしょうか。自分の考え思いを中心としている私だけれども一人ひとり人間存在の事実の中にどうしても考え思い都合が通らないものを持って今もここに生きていますよと。だからこそ生きるとはなんなんだろうか。なぜ生きなければならぬのだろうか。それが大きな問題となつてきているということ。親鸞聖人の教えというのは答えを出す教えではありません。自分自身に問いをいただく教え。生きるとはどういうことなんだろうか。なぜ生きなければならぬのか。その意味を教えに聞いていつて欲しい。その声の響きを私たちが聞いていく、それがこの報恩講であると思います。

- ◇平成二十五年十月十八日、「淨光寺報恩講・結願日中」の法話録でございます。
- ◇行事のご案内
- 「お太子さん」三月二十一日・午後一時 法話 木村宣彰師 (鈴木大拙館館長)
- 「おてらくご」五月九日・午後七時 落語 立川志らら